

## 共意識の原初性と時間的継起の实在論 B. デイントン『意識の流れ』についてのノート

村田 憲郎

Primitivity of Co-consciousness and Realism of Temporal Succession:  
A Note on B. Dainton's *Stream of Consciousness*

MURATA Norio

### Abstract

This note tries to understand Barry Dainton's work *Stream of Consciousness* (2000) along the lines of its main two theses, the primitivity of co-consciousness and the realism of temporal succession. The discussion of this book does not belong to phenomenology in its narrow sense but rather to analytic philosophy, especially a cluster of theories called "philosophy of temporal experience". But It treats Husserl's theory of time critically and causes some reactions from phenomenologists. Despite of wide difference of ontological position of this book, I think that the two points above, the primitivity of co-consciousness and the realism of temporal succession, are also instructive for the transcendental phenomenology.

### はじめに

本論は、バリー・デイントン Barry Dainton の著作『意識の流れ *Stream of Consciousness*』(2000)における時間意識の議論を、その主要な二つの主張、共意識の原初性と時間的継起の实在論の筋道にそって理解することをめざす。この著作の議論は狭い意味での現象学に属するものではなく、どちらかと言えば英語圏の分析哲学の系譜に属するものであるが、近年分析哲学でも「時間的経験の哲学 philosophy of temporal experience」と呼びうるような時間意識の研究が盛んになっており、中でもこの著作は「とりわけここ10年ほどで、分析哲学におけるもっとも包括的な時間意識の議論の一つ」(Zahavi, 2007 435)と言われ、活発な論争を呼び起こしている。実際この著作がフッサールの時間論を批判的に取り上げたこともあって、現象学の立場からもリアクションが見られ<sup>1</sup>、私としてもフッサール時間論研究の一環として、

こうした議論の内実を踏まえておきたい。

なお生産的な議論のためには、早急に反批判に向かうのではなく、まずは彼自身の主張の主要な筋道を押さえるべきであることは言うまでもないが、それにとどまらず、中でも本書の上の二つの主張、共意識の原初性と、時間的継起の实在論の主張は、まったく異なる超越論的観念論という立場から営まれるフッサールの内的時間意識の現象学にとっても、より深い理解を促すものと思われた。これは、デントンがとっている「現象化された唯物論 phenomenological materialism」(p.7)<sup>2</sup>という独特の存在論的立場が、フッサールの超越論的観念論とはおよそ正反対であるだけに、特筆に値する。この「現象化された唯物論」は、現代でよく議論される心身問題については、物理主義ないし唯物論の立場をとり、物理的实在から出発して心とそこに現れる世界を説明しようとする。とはいえ、これはわれわれの心に対して現れる経験の世界を、本当は存在しない、いわば仮象だとみなし、物理的实在による説明を与えることで消去ないし還元してしまうような立場ではない。物理学が描くような世界像を实在の基盤としながらも、むしろそれが制限された捉え方であることに配慮し、他方では現象的经验にも实在を認めながら、その領野には固有のアプローチが必要であると考えるのがこの立場である。実際、一般相対性理論のような物理学理論は、空間—時間の内的な本性について何も教えてはくれないと彼は述べる (p.6)。そこで、時間の本性とは何かを現象的经验から汲み取りながら、この性格は物理的世界の少なくとも一部がもつ特性でもあるとして、そこに位置づけることで、時間の現象的性格とその特性の存在論的实在性を同時に守るような立場を、デントンはここで「現象化された唯物論」と呼んでいるのである。

この立場は一見したところ、主観性が世界の一般形式を構成するフッサールの超越論的観念論とは相容れないほど真逆であるように思われるが、私はむしろ、超越論的観念論者にとっても实在論的な立場が行う説明のあり方について大いに学ぶところがあると考え。超越論的観念論は、単純に实在論と対立するものではなく、カントも言うように「超越論的な観念論者は経験的には实在論者たりうる」(A370)。実際フッサールは、時間は流れているように見えるが、実際には経過していないと主張しているのではなく、デントンと同じく時間の实在論を擁護していると言える。ただし現象的な時間性を説明するのは、デントンのように物理的世界ではなく、時間を構成する超越論的な意識の流れということになるが、フッサールもまた、現象的な時間性を説明するものに、より根源的な实在性を認めることで、現象的な時間性の实在をあわせて擁護する、という議論になっているはずである。

なお実際にこの書でフッサールの時間論が批判的に取り上げられるが、この批判は彼の理解の一面性を示しており、そのことはすでにフッサール研究者たちから指摘されている。むしろ本論ではこの点にも触れるが、私の印象ではむしろデントン自身の立論から現象学者は学ぶところがあり、それは現象的经验の記述から出発しながら、同時に議論に耐えうるような哲学はどのように論を展開すべきかという姿勢に関してなのである。

本論ではこうしたことを念頭に置きつつ上の二点を検討した上で、各々について現象学者としての私自身の見解を述べたい。

## 1. 共意識の原初性

この著作の前半部分の課題は、意識の基本的な関係的性格である「共意識 co-consciousness」を規定することである。共意識とは、その名の通り何かと何かが共に意識されているというあり方であるが、デイントンによれば、共意識の概念は他の概念によって説明できない、いわば究極的な説明項であり、もっとも基礎的、原初的な概念である。興味深いのは、この主張は意識が作用—内容図式をもたないという論点と結びついている点であり、意識の志向的構造を認める現象学者にとって、このあたりの議論が脅威となりうるかは検討に値しよう。

デイントンは議論の初めに背景的意识のあり方について注意を喚起する (p.29f) が、これは現象学者にも馴染みぶかい話題だと言える。われわれの経験は、特にわれわれが明示的に向かっているものに尽きるわけではない。私が本棚の本を眺め、いくつかのタイトルに注意するとき、当該の本と並んで、本棚に並ぶ他の多くの本が共に意識されており、明示的な意識の対象ではないが、意識の背景をなしている。このように、対象へと向かいそれに注意を向ける経験のみが経験なのではなく、「注意されない経験も、依然として経験である」(p.31)。具体的にこのような現象的背景をなす経験に、デイントンは三つのものを挙げている。1) 身体的な経験。例えばスポーツするときの意識は、主に相手プレーヤーやボールに向かっているが、その背景では多様な筋肉感覚が経験されている。2) 周囲世界の経験。足元の地面、部屋、壁、家具、また通り、広場や木々などは、大抵の場合、主題的な意識が向けられないままわれわれの周囲世界を形成している。3) 気分、自己感情、意識の感じなど。われわれが世界の対象に向かうとき、われわれの心的・心理的側面もまた、ともに意識されている。

こうして現象的経験の領野はわれわれが具体的に生きる世界に関するものすべてを含むのであり、こうした領野の研究はどのように進められるか、という問題が最初に立てられるだろう。そこで「内観 introspection」の方法が挙げられる。それはいわばわれわれの意識そのものを反省的にまなざし、注意することであり、対象でなかったものを対象とすることである。ところで、ここでよく指摘される困難がある。それは、現象的背景とはそもそも注意を向けられていない周辺の意識であるのに、そこに注意を向けてしまっただけは、現象的背景であることに固有の現象的性格を失ってしまうのではないか、というものである。しかしデイントンはこの問題にあまり拘泥しておらず、これを乗り越えるため二つの手法を挙げる (p.33)。一つは、短い記憶に依拠した内観である。つい先ほどの経験を思い出しながら、そこで同時的には注意を向けられていなかったものに、記憶の中であらためて注意を向けるということは、不可能ではない。またもう一つは、心的状態を排他的な主題とする能動的な内観ではないような、受動的な内観 passive introspection という方法である。この手法を理解するためには、通常の強い意味での注意（一次的注意 primary attention）に加えて、「二次的注意 secondary attention」、つまり或るものを一次的注意の対象とし、そこから注意をそらすことなく、その背景に現れているものに向けられる副次的注意を考えればよい。例えば車を運転する際に、信号で停車し、信号を渡る子供達に注意を払いながら、その向こうにある信号にも意識を向ける、といったこと

は可能である。これを内観にも応用して、或るものに主題的に注意を向けながら、それと同時にその現象的背景における心的状態へと二次的注意を向ければよい。さしあたりはこうして、現象的経験の領野を記述的に探求することができるだろう。

### 1. 1. 強い内観テーゼの拒否

ところでここでデイントンがやろうとしているのは、ブレンターノやフッサールのように、現象的経験における個々の意識作用の類型を網羅的に列挙することではない。むしろ彼はこの領野における最も遍在的で基本的な関係形式に焦点を合わせる。この形式が、意識の統一unityないし共意識（ともに意識されていること）である。現象的経験は、意識に現れる限りでのすべての対象がそこに含まれるような領野なのだから、そこに現れている対象どうしはすべて、共意識の関係にあると言えるように思われる。ではこのような関係はどのように成立しているのだろうか。

すぐに思いつく一つの答えは、そうした統一は反省的に意識されることによって、つまり内観されることによって形成される、というものであろう。例えば家の庭と向こうの山とを関係づけるのは、一望のもとに見渡す私の視点であるように、経験どうしを結びつけるのは、それを内観する私の意識である。この見解は、現象的経験の性格にわれわれが注意するときはすなわち内観しているのだから、説明の候補としては不自然なものではない。こうしてデイントンは、意識の統一と内観との関係についての考察を始める（p.34f）。

ここでデイントンは、内観と意識の統一ないし共意識との結びつきについて、強いIテーゼ（Introspection-thesis 内観テーゼ）と弱いIテーゼとの二つのヴァージョンを定式化している（p.35）。

#### ・強いIテーゼ：

共意識は内観可能性によって構成される。諸経験が共に意識されているのは、それらの経験が内観されている、または、内観可能だからである。トークン<sup>3</sup>経験のグループが共に意識されているのは、それらの経験が、単一の内観的な覚知<sup>4</sup>の顕在的な対象、あるいは、潜在的な対象であるときであり、かつそのときに限る。

#### ・弱いIテーゼ：

共意識は内観可能性によって構成されるのではなく、両者は相関している。諸経験のグループが共に意識されているならば、それらの経験はすべて、単一の内観的な覚知の顕在的、あるいは、潜在的な対象となる。

両定式の後半部分に見られるように、強いテーゼでは共意識の必要十分条件が内観ということになっており、このことを「構成される」と表現しているのに対して、弱いテーゼでは内観は単に共意識の必要条件となっており、これを「相関している」と呼んでいるようである。以下、順次検討される。

まずは強いIテーゼであるが、このテーゼは比較的簡単に退けられる (p.35-37)。というのも、強い意味での内観は、多かれ少なかれ注意することとして特徴づけられているからである。強いIテーゼは、共意識の必要十分条件として内観的な覚知を要求している。しかしすでに現象的背景の議論から明らかなように、共に意識されているものははじめから注意され、内観の対象になっているわけではない。デイントンはこのことを主張するのに、公園を散歩しているときの経験を例に挙げているが、散歩などはまさしくそのすべてに私の注意を向けきれないほど現象的经验が豊かであることをよく実感させてくれる行為だと言えよう。そして内観の対象ではない要素が含まれているにも関わらず、私の意識経験は統一を保っており、共に意識されているという関係性が成り立っている。つまり、「内観されている経験と、それと共に意識されている内観されていない経験との統一」(p.36)が成り立っている。したがって、内観によって共意識が成り立つという議論は退けられる。

### 1. 2. 弱い内観テーゼの拒否

弱いIテーゼは、共意識の十分条件ではないが、共意識の必要条件として、単一の内観を要求する。つまり、いくつかのものが共に意識されているとすれば、それらは必ず一つの内観の対象となりうることを主張するが、しかしその逆、一つの内観の対象となることが、必ず共に意識されるという関係をもたらず、ということは主張していない。しかしいずれにしても上ですでに内観を伴わない共意識という反例が示されたのだから、弱いテーゼもやはり成り立たないと思われるだろう。

では上で考えられた内観よりもさらに基礎的意識として内観を想定し直すとどうなるだろうか。デイントンはあらかじめ、そもそも注意の様態を含んでいないものも含む、最も基礎的な意識のあり方として覚知 awareness という語を導入している。上の議論では内観にも能動的内観と区別して、二次的注意に依拠する受動的な内観を想定していたが、これに対して受動的な覚知はそもそも注意的な意識でも (p.32)、選択的な意識でもない (p.33)。この考えを推し進めて、極限にいたるまで能動性や注意的性格をもたない覚知というものを考えることができ、それはWP覚知 (wholly passive awareness) と呼ばれる (p.39)。弱いIテーゼにおいて考えうるような覚知の候補はこのようなものとならざるをえないだろう (ibid)。しかしこのような意識は、もはや記述的に確認することが難しいレベルに存するため、あらためて別の論証が必要となる。

その後の道筋は複雑だが、主要だと思われる道筋のみをここで再現する。まず、関係する別のモデルとして、意識はすべて覚知と内容との二極性をもつという捉え方が挙げられる。この二極性モデルの主張はAテーゼ (覚知テーゼ) として以下のように定式化される (p.42)。

#### ・Aテーゼ：

意識は覚知—内容構造をもつ。

このテーゼは、どんな種類や様態の意識であれあらゆる意識が覚知をもつことを主張してい

る。したがって意識のあり方が極めて多様であることを考慮するとき、この覚知はそれらすべてに共通の要素であるから、それ自体はこれといった特徴をもたない透明な意識の場であることになる (p.43)。仮にこの覚知が意識として特定の特徴を持っているならば、現象的経験のすべてにそのような特徴が付帯することになってしまうだろう。

しかしこのような透明な覚知は、デイントンによれば、覚知と内容との存在依存の関係を考えるときにディレンマを引き起こす (p.48-51)。内容の存在は、覚知に依存しているか、覚知から独立しているかのいずれかだろう。そこで一方で、内容が覚知に依存しているとすれば、覚知によって内容が成立していることになるが、そもそも透明で特定の特徴を何も持たないような覚知が、いかにして内容を生じさせることができるのだろうか。ここでAテーゼはこのことを説明するという困難に直面してしまう<sup>5</sup>。他方で、内容が覚知から独立しているとすると、覚知が欠けていても、内容はそれ自体で存立することになる。そうすると、覚知をともなった内容と覚知を欠いた内容との相違はどこにあるのだろうか。そもそも覚知が限りなく透明な媒質であり、特定の特徴をもたないものであるだけに、それが付け加わった場合と欠けている場合での内容の相違はますます理解し難いものとなる。むしろなにゆえわれわれは覚知を想定することなく経験の内容そのものについて直接考え、また記述してはならないのか？

こうしてデイントンは、一般に意識が覚知—内容構造をもつという見解を拒否する。代わりに彼が採用するのは、「経験の端的な把握 Simple Conception of experience」という立場である (p.57)。つまり、経験は端的に経験であって、覚知—内容構造のような普遍的な構造をもっているわけではなく、それゆえわれわれは現象的経験へのアプローチに関して特別な配慮を要せず、端的に記述してよい。そして現象的経験に遍在的な関係である「共に意識されていること」もまた、その形式を可能にする意識などに遡る必要はなく、むしろ議論の出発点として、原初的なものとして位置づけられるべきである。

ちなみに共意識については次章で、もう一つの候補である空間的關係による説明も検討されるが、空間的關係もまた共意識を説明することはできないとして退けられる。

### 1. 3. 現象学的立場からのコメント

上の議論が妥当であるかどうかはあらためて検討を要することであるが、現象学者にとって興味深いのは、現象学でもよく論じられる、内的意識ないし先反省的自己意識にこの議論が関わるように思われるからである。実際デイントン自身もまた、この章が（そのアイディアの主である）ブレンターノやサルトルの影響を受けて書かれたと述べている (p.xv)。では実際にはこの議論はどのように先反省的自己意識の教説に関わってくるだろうか。

このことを考えるには、意識をどのレベルで捉えるかを考えなければならない。現象学では一般に、意識が志向的構造をもち、フッサールが「志向的本質」と呼んだ、意識の内容（「質料」）とその様態（「作用性格」）という二つの要素が考慮される。このレベルで考えられるならば、デイントンの「端的な理解」は現象学に対する批判として捉えられるかもしれない。

しかし彼の議論はこの水準で捉えるべきではないだろう。志向的意識に関する議論は、相対的に独立した意識の要素として取り扱える個々の意識作用に対して、その類型を体系的に列挙

し、分類していく議論であるが、このとき『イデー I』でそうされたように (Hua.III/1, 182), 時間意識の問題は、より根底的で独立した問題系を構成するものとして捨象されうる。他方デイントンのこの章での議論は、志向的な意識作用の類型ではなく、現象的背景なども含めた意識にとってより遍在的な共意識という形式の基礎づけをめぐるものである。また彼の主張は、経験には覚知—内容の構造がどこにもまったく見出されない、というものではなく、ただその構造が普遍的でもっとも基礎的なものではないことを述べているにすぎない。そうだとすれば、それはフッサールの志向的意識の議論と矛盾するものではないだろう。

ではより根底的な時間意識の議論においてはどうか。ここで想起されるのは、時間意識の現象学においてよく議論された、このレベルにおいては「統握—内容」図式が当てはまらないという論点である。時間意識において働く、現在の瞬間を捉える「原印象」・過ぎ去りゆくものを保持する「把持」・未来から到来するものを待ち受ける「予持」というミニマルな意識においては、統握 (apprehend 把握・解釈) される内容とそれを統握 (把握・解釈) する意識、という図式が当てはまらない。まさしくこの意味においてならば、現象学者はデイントンの A テーゼの拒否に同意することができる。

では、先反省的自己意識はどうなるのか。ザハヴィが指摘したことであるが (Zahavi, 1999), 私の意識にはすべて暗黙裡に、それ自身が意識されているという性格が備わっており、これは明示的な反省作用に先立ってすでに成立している。これをデイントンの語法で言い直せば、覚知は内観に先立ってすべての経験に伴うことになるだろう。A テーゼの拒否は、先反省的自己意識の拒否と同じことなのだろうか。このような問いかけをデイントンに向けたとすると、あらかじめふた通りの返答が予想される。

第一には、彼は A テーゼを拒否するのと同じ理由で、先反省的自己意識を拒否するかもしれない。しかしその場合には、彼が主張する「経験の端的な把握」における「経験」に対して、覚知を伴わないにもかかわらずなにかゆえそれを依然として経験と呼ぶのか、あるいは覚知に先立つ「共意識」について、それを「意識」という語で表すのはどういうわけかと問い返すことができるだろう。端的な「経験」をまさしく「経験」と呼ぶのは、それが経験されているからではないのか。また「共意識」と言われるのは、意識されているからではないのか。だとするならば、そう言うための根拠が先反省的自己意識なのであり、この筋道で彼を説得することができる。

しかし第二には、彼は先反省的自己意識を直ちに認めるかもしれない。むしろここでの内観テーゼの拒否は、すでに意識ないし経験の構成要素として先反省的に意識されているものを、それに加えてことさらに意識の対象として捉え直す必要はない、という主張なのかもしれない。もしそうだとするならば、この議論はブレンターノからフッサールに受け継がれた、内的意識は明示的な反省作用ではないという議論と同じ筋道で理解しうるものである。もし意識作用を捉え直すのに明示的な反省作用が必要ならば、さらにその反省作用を捉え返すために別の反省が必要となり、こうして無限遡行が生じてしまう。それゆえブレンターノは、あらゆる心的現象は一次的志向に加えて、自分自身を客観とする内的意識という二次的志向をもっており、新たに反省作用を必要としないとしたし、「志向的本質」の教説によりこの議論が使えないフッ

サルは、基礎をなす層においては、時間意識の働きによって意識それ自身が意識されており、別の新たな反省作用を必要としない、という構えをとった。おそらくこの次元であれば、この教説と、デントンの「経験の端的な把握」とは少なくとも両立不可能な議論ではないだろう。

## 2. 時間的継起の实在論

これまでの議論は、主に共時的な共意識を問題にしていたが、5章以降では、通時的な関係性が議論される。そこでこの著作のもう一つの大きな主張である、時間意識に関する「オーバーラップ理論」が提唱される。彼が擁護したいのは、時間的継起の实在——リアリティと言ったほうが腑に落ちるかもしれない——を認め、説得的に擁護する立場、つまり实在論である。デントンによれば、時間的な変化や持続の経験は、色や形の経験と同じくらい直接的な経験である (p.115)。その中で彼が提起する「オーバーラップ理論」とはどういうものか、またこのことで彼がどのように時間の实在性を擁護するかを見てみよう。

### 2. 1. アウグスティヌスのドグマ。記憶説、PSA と PPC

ここでも論点は多岐にわたるが、興味深い論点のみを取り上げよう。

まずデントンは「見かけ上の現在 specious present」<sup>6</sup>という記述的に接近しうる現在の概念を取り上げる。この現在概念はすでに持続を持ち、直接的に経験される現在であり、これを土台として議論を進めていく。しかしこれに対して、現在とは未来と過去とが境を接する瞬間であり、何ら持続をもたないという見解も考えられよう。デントンはこうした時間概念をアウグスティヌスに帰している (p.120)。このアウグスティヌスの論点が説得力をもつ理由の一つとして、過去と未来は存在しない、という一般の通念がある。このことを厳密にとると、わずかな持続でさえ過去ないし未来にまたがってしまうのだから、まったく幅を持たない現在の瞬間のみが实在的である、という見解にいたる。これに対してデントンは、未来はいまだ存在しないものではあるにしても、過去にはある程度实在性を認めてよいと考えている (p.122)。現在の瞬間説をとらないという彼の一貫した方針はこの後も見られる。

次に、時間的持続ないし変化の直接的経験を記憶によって説明する「記憶説」が検討される (p.123-7)。あらかじめ述べておくと、この著作では、時間的経過の直接的経験において、記憶の関与はかなり低く見積もられることになる。

例えば、音C, D, E, Fが順次鳴っていき、メロディーC-D-E-Fとなって聞かれるとする。このメロディーは一つの継起であり、継起として経験される。このことは記憶によって、例えば最後のFを聞いている時点におけるC, D, Eの記憶を持つことによって説明できるだろうか。デントンはできないと考える。例えば数時間前に鳴ったC, D, Eの音について記憶を持つ場合など、実際に記憶は成立しているにも関わらず、継起として聞かれているわけではないだろう。まず、Cの後にDが、Dの後にEが、Eの後にDが、それぞれ直接的に続くということが継起の成立には必要なものであり、このことを説明しなければならない。また、C, D, Eの記憶が単に同列にFに伴っているのではなく、C, D, E, Fという特定の順序をも



って継起したということも成り立つのでなければならない（そこで記憶では不十分なこの二つの点を信念 belief による説明によって補完しようとする試みが考えられるが、この試みはうまくいかない）。

そこでデイントンが導入するのが、長期記憶と区別される直接的な短期記憶である (p.126)。短期記憶は長期記憶に欠けている詳細な細部 detail と鮮明さ vivacity をもっている反面、長期記憶と異なり、われわれの意のままに思い出すことができず、われわれの意志から独立に働いている。このような非一意思的な短期記憶はフッサールの把持 Retention を思わせるが、これを援用するとうまくいくだろうか。

ここで一つの疑問が浮かぶ。それは、この記憶説は論点先取をしていないか、という問題である (ibid)。メロディー C-D-E-F は、C から D への、D から E への、E から F への各移行についての、おのおのの短期記憶から合成される、というのは一つの説明として成り立っているように見える。しかしこれは継起をすでに前提しているのではないか。C から D への移行はすでにごく短い継起であり、記憶によって説明されるはずのものがむしろ説明項のうちに前提されている。

そこでこの反論に答えようとして、この短期記憶がさらに微小な短期記憶によって構成されているという「入れ子的短期記憶 nested short-term memory」(p.127) の説がとられるかもしれない。そうすると、この微小な短期記憶は、究極的には瞬間についての記憶しか説明項として認めないというところに行き着くだろう。もしこうした説をとるならば、時間的継起を継起でないものによって説明することになるから、完全な反实在論をとることになるだろう。しかし、デイントンが「強い主張」<sup>7</sup>と呼ぶこの主張によれば、まず第一に、われわれは瞬間しか覚知しておらず、本当のところはいかなる持続も覚知していないことになる。また第二に、われわれがごく短い継起を経験したと想着しているとき、時間の幅があるものは無限に分割できるのだから、実際にはそこに膨大な、ほとんど無限の数の入れ子になった、瞬間についての短期記憶が含まれていることになる。そこからデイントンは、この主張は受け入れがたいと結論づけている

そしてこの章の最後では、問題がより明確に定式化される (p.132-5)。そもそも意識が時間的に広がりをもつことが否定されるのは、どのような理由によるものか。第一にはアウグスティヌスの論点があり、また第二に、覚知-内容図式がまだ影響力をもっているからだとされる。しかしもう一つ重要な原理がある。ウィリアム・ジェームズは、われわれの心が継起することと、自身が継起していることを知ることを区別し、感じの継起 succession of feeling と、継起の感じ feeling of succession とを区別した (p.132)。経験の継起をもちながら、継起についての経験をもたないということはある。では後者の成立には何が必要だろうか。実際に継起したことを知るためには、現在の経験と同時に、さっき過ぎ去った経験が、同時に現在において与えられていなければならない。この原理は、「同時的覚知の原理 Principle of Simultaneous Awareness」(PSA) と呼ばれる。この同時性が成り立つ現在を厳密に受け取るならば、それは瞬間的であるか、せいぜい識別できないほど短いのでなければならない。

ちなみに、過去の要素はこのように現在において「同時に」聞かれるのではあるが、しかし

継起において起こったもの「として」聞かれるのでなければならない。あるメロディーにおける音の継起は、もし同時的なもの「として」聞かれるのであれば、それはメロディーではなく和音、コードになってしまうだろう。このように継起「として」解釈することを PSA は否定しないが、しかしこの解釈は単一の瞬間的覚知において起こる (p.134)。この場合、意識の側にある覚知作用は瞬間的であるが、その内容は時間的広がりをもつ。比喩的に表せば、時間を空間に置き換えることになるが、PSA の描く時間意識を、光源をなす一点から広がっていくサーチライトのようにイメージすることができよう。したがって、この説によれば作用の時間性と内容の時間性とは区別されるべきであり、先に見た、作用—内容の区別を主張する A テーゼとも関連すると言える。

他方、これに対立する原理は「提示的合致の原理 Principle of Presentational Concurrency」(PPC) と呼ばれる。この原理にしたがえば、意識の側にある覚知とその内容とは合致 concur している<sup>8</sup>。つまり意識の側と内容の側との間にギャップを認めない議論になっている。したがって、こちらはデントンの主張する「経験の端的な把握」とも折り合いがよいと言えよう。

もし時間的継起の実在論を擁護するならば、PSA は支持し難いとデントンは考えている。その理由の一つは、瞬間的覚知がいかにして過去のもを覚知するのか理解できないからだ。PSA の採用はむしろ反実在論を帰結するように思われる。つまり、過ぎ去ったものは記憶においてイメージによって再現されているにすぎず、継起的なものは存在せず、実際には、ちょうど音声言語がスクリーンのテロップで表示されるように、継起的なものが同時に表示されているにすぎない (p.135)。この種の反実在論を、彼は「再現的反実在論 representational anti-realism」と呼んでいる。

こうしてデントンは、彼が擁護しようとしているものと、反駁すべきものとを明確化する。彼がしようとしていることは、PPC を擁護し PSA を批判することである。

## 2. 2. フッサール批判

続く6章では、デントンはブロードとフッサールの時間論をとりあげ、批判的に検討している。ここではフッサールについての議論にのみ注目する (p.150f)。

彼の診断によれば、フッサールのとりわけ初期の時間意識の現象学は「再現的反実在論」の一バージョンとなる (p.151)。つまり、フッサールは上で定式化した PSA に依拠した理論になっているという。デントンによれば、フッサールは意識の流れを、瞬間的経験の凝縮した継起から成ると捉えている。ただしフッサールは現在の経験から、過去についての再現表象 representation の意識を区別しており、これを「把持 Retention」と呼ぶ。これに対して、現在の意識は「原印象」と呼ばれる。これは時間的広がりを持った経験がここから発生する「源泉点」である。この原印象が瞬間的意識であることをデントンは強調する。確かに、この意識にはたっいま過ぎ去ったものへの「把持」意識が付随しており、そのことによって時間的広がり意識することができる。しかし広がり内容は内容として意識されているのであり、その内容を意識する覚知そのものは瞬間的である。

なお、フッサールは、内容が継起し連続的であると述べるだけではなく、われわれの覚知作用そのものもまた連続的であることを、それ自身覚知していると考えていた。つまり内容面だけでなく意識作用の面でも統一が形成される必要があると考えていたのである (p.153)。そのために彼が援用する理論が、把持の連鎖という議論である。把持は、単に把持であるだけでなく、把持されている過ぎ去ったものがかつて現在であったときに把持されていたものも共に把持するのであり、したがって把持は同時に把持の把持でもあるのである。同じ理由で、把持の把持は把持の把持の把持であり、把持の把持の把持の把持であり、等々となり、このようにして過去の全体が現在において把持されている。したがって意識作用の側面もまた、把持する意識の把持という形で、連続性ないしは統一を形成していることになる。

さてこのようにフッサールの初期時間論を描き出した後、彼はフッサールの時間論の問題を指摘するが、その際フッサールがブレンターノに向けた批判を取り上げ、この批判がフッサール自身にも当たっていないかを問いかける。フッサールは自分の時間論の出発点とした師のブレンターノの時間論について、二点批判を加えている。まず一点目は、ブレンターノは変化の直接的経験と、変化のイメージないし想像とを区別していない、という点である。この区別は、変化の直接的経験が可能であるとみなすならば、当然必要になってくるだろう。また二点目は、過ぎ去ったある感覚Sの再現表象 representation が、現在に属しているとすれば、Sはなにゆえ現在に属しているにもかかわらず、過去に起こったことだという意識を可能にするのか、という疑問である。後者の点に関してはフッサールは厳しく、ブレンターノが「時間的なしるし」のようなものをもつと述べたことに対して、それは単に新しい言葉を使っただけで、説明になっていないと診断している。

しかしデイントンによれば、これら二つの困難は、フッサール自身にも降りかかる。原印象と把持の区別は、直接的経験とその再現とを区別するために導入されたのではないか。とすれば、持続や連続性を可能にする把持の働きも、結局のところは再現表象の働きであり、直接的な経験とは言えないのではないか。しかし直接的経験である原印象は瞬間的意識と規定されているために、持続や連続性を直接的に覚知することは不可能になっている。また第二の点にしても、ブレンターノの過去の再現表象がなにゆえ現在に属しながら過去の意識を可能にするのが不可解なのと同じ程度に、フッサールの把持は、なにゆえそのような働きをするのか不可解なのではないか。フッサールは把持は「特殊な志向性」であると述べており、また記憶イメージとも異なると主張するが、それは結局ブレンターノと同じく、言葉の上だけの説明にすぎず、実質的な説明にはなっていないのではないか。

さらにデイントンは、記述的な観点から二つの批判点をあげている。一つには、「とどまる内容」の問題がある。例えば実際に指をパチンと鳴らしてみよう。その音はすぐさま消え去る。ここでフッサールによれば、把持された内容がとどまっているはずだが、それは一体どこにあるのか？ デイントンはそんなものに気づくことはないと言う。もう一つの問題は「詰まった意識」の問題がある。フッサールによれば、過去の全意識は統一をなして現在のうちに把持されているとされるが、そのような何もかもが詰まった悪夢のような意識を、われわれは本当にもっているだろうか。見られるように、ここにはすでに見た記憶説の「入れ子の短期記憶」に

対するのと同じ反論が行われている。

もう一つ、PSA から出てくる大きな問題が、「反復される内容」の問題として定式化されている。音C, D, E, FからなるメロディーC-D-E-Fについて、音Cが鳴っているときはCをもつが、把持の働きにより、DのときはC-Dをもち、EのときはC-D-Eをもち、FのときはC-D-E-Fをもつことになる。そうすると、本来Cは数的に一つの音であるはずなのに、4度繰り返して（あるいは分析される瞬間の数だけ多く）聞かれることになるのではないか。しかしそのようなことは起こらない。PSA に依拠した理論は、この問題を解かなければならないはずである。

### 2. 3. オーバーラップ理論。時間の実在論、移行のパターン説

デイントンは続く章で、これまで指摘されてきた問題を材料にしながら、自身の見解を打ち出していく。彼が提唱するのは、ごく短い持続をわれわれは直接的に経験しているが、さらにそれらの持続が重なりあう overlap ことによって、より広範な経験の通時的な統一が形成されるという「オーバーラップ理論」である (p.163-5)。この理論をデイントンは師の John Foster から受け継いだ。

オーバーラップ理論によれば、メロディーC-D-E-Fの場合、短い持続C-D, D-E, E-Fがあるとすると<sup>9</sup>、C-DとD-EとのDがオーバーラップしてC-D-Eが形成され、さらにE-FにおけるEがオーバーラップしてC-D-E-Fが形成される。それゆえ反復される内容の問題は生じず、数的に一つの音は一度しか聞かれないのであるが、フォスターはこの議論を、PSA から出発して考えていた。すなわち、各瞬間ごとの覚知が時間的に広がった内容をもっており、その内容がオーバーラップする。ただし覚知の時間と内容の時間とは正確に比例関係が成り立っており、それゆえ心的な時間は客観的な時間に挿入されうる。デイントンはこの方向を徹底することによって師の理論を乗り越える。つまり、比例が成り立っており、挿入が可能であるならば、そもそも心と対象とにそれぞれ別の時間性を考える必要はないではないか。また、瞬間的な覚知の意識をそれ自体として考えるならば、どのようにして別々の独立した瞬間点に属する意識作用が重なることができるのか。こうした疑問から、デイントンはPSA を拒否し、PPC を導入する。つまり、作用と内容とが時間的に合致しているようなごく短い持続が直接的に経験されており、より長い持続が形成される場合にはこれがオーバーラップする、とする説である。これを彼は「一元的オーバーラップ理論」とも呼んでいる (p.166)。なおオーバーラップは、通時的な共意識によって形成されるものであるが、この共意識が成立するためにさらに覚知や内観が必要となるわけではないことは本書の前半部で議論された通りである。

このオーバーラップによって、反復する内容の問題が解消されるほか、時間的継起が直接経験されているという実在論が支持される（他にもいくつかの理論を見るなかで指摘された問題点が解消される）。しかし一つの問題が指摘される。時間の流れは、何かが未来から現在を経て過去へと流れる、あるいは時間そのものが過去から現在を脱して未来へと向かっていく。いずれを時間の流れと呼ぶにしても、一方向的であり非対称的であるように見える。しかし、ここで共意識によるオーバーラップしか前提できないとすると、共意識は共時的な関係にも妥当

する対称的な関係である（AがBとともに意識されているとき、BもまたAとともに意識されている）。また、記憶説が継起の直接的経験の説明に失敗したように、時間の方向を説明するのに記憶を援用することもできない。では時間の流れの方向は何によって説明されるのか。ここでデイントンは、時間の一方向的な推移は経験の一般的構造によって説明されることではなく、むしろ個々の経験内容が特有にもつパターンによって説明されることだとする（p.173-177）。時間的な変化や持続は色や形と同程度に直接的に経験されるとする、彼の主張が思い出される。彼の考えを敷衍すると、例えば花が枯れ、枯れた花は生き返らないということは花についての経験がもつ特有の性格に由来し、こぼれたミルクがもとには戻らないのは、ミルク（あるいは液体一般）の本性に属する性格に由来する、ということであり、こうした個々の現象のタイプに即してのみ、時間的経過の不可逆性がある、ということであろう。

おそらくはこの論点からの帰結だと思われるが、時間の流れの实在性を擁護しながら、彼は例えば形而上学的時間論における四次元説に対して、いかなる矛盾点も見出していない（p.177-9）。現実世界に一度でも存在したものは、四次元的な時間空間上に位置づけられ、それは現在であろうと過去であろうと同じ資格で存在するというのが四次元主義であり、したがってこの立場からは、何ものかが時間の流れによって生成したり消滅したりする（つまり非存在から存在へ、存在から非存在へと変化する）ということは否定されると一般に考えられているが、デイントンの議論によればそもそも生成消滅するという事態も特定の存在者に固有の性格として、特定の四次元的な空間時間位置へと局所化されることになるのだろう。

## 2. 4. 現象学的立場からのコメント

こうした一連の議論もまた、解像度を上げて検討される必要があるのだが、フッサール批判についてはすでに現象学者からの応答があるので、ここでは私なりに<sup>10</sup>ポイントのみを列挙したい。

まず、瞬間的覚知から出発して、時間的継起の实在論を主張することは難しい、という点に関しては同意できる。瞬間的同時的な記憶は、時間的継起を時間的継起でないものによって消去しないしは還元的に説明することになり、こうしてこの説明は時間的継起の反实在論を支えることになるだろうが、私もこの見解は支持できない。ではこれに対して、デイントンが採用するPPCとオーバーラップ理論によって、時間的継起の实在論はうまくいっているのだろうか。つまりそれは時間的継起を説明していることになるのだろうか。むしろ記憶説の検討の際に見たのと同じ、論点先取を犯してはいないだろうか。というのも、ごく短い継起はあらかじめ直接経験されていることになっており、より長い通時的継起はすでに前提された継起から説明されているにすぎないように見える。

しかし、このような仕方ですべての实在論を擁護するとしたら、説明ということに課せられる課題も、消去主義や還元主義に比べて軽くなってくるのではないだろうか。实在論からは、そもそも時間的継起が究極的には消去ないし還元できないことも帰結しうるのだから、説明項のうちに継起的なものがすでに萌芽的に含意されていたとしても許容されるのではないか<sup>11</sup>。

それではこのような場合、説明とは何をすることなのだろうか。私の考えでは、より単純な、

あるいはわれわれによってより理解しやすい説明項のセットによって、より複雑な、あるいはより理解しにくい事柄が説明されていれば十分であるように思われる。そして、短い継起はより長い継起よりも単純であり、その直接的な経験から出発する説明には十分な意義があるのではないか。デイントンが与えているのはそのような説明であるように思われる。

そしてまさしくこのような方向性で、フッサールの時間意識の現象学の意義を認めることができそうである。時間がそもそもいかにして構成されるかを、フッサールは超越論的な意識の流れという別の時間性によって説明しようとする。このような試みは、無時間的なものから時間的なものを説明するといういわば神話的な説明でないとするれば、説明項の中にさらに「より根源的な時間性」を見出すことになり、無限遡行あるいは論点先取に陥るのではないかという恐れと無縁ではありえない。しかし、デイントンの時間的継起の实在論に意義があるとしたら、それと同程度には、意義を認めることができそうに思われるのである。むしろすでに述べたように、デイントンは物理主義から出発して現象的经验を説明しようとするのに対し、フッサールは超越論の主観性から世界を説明しようとするという違いはあるが。

そうすると、現象学的時間論としては超越論的な意識の流れにおいてどのような原理を説明項として立てるべきかという課題が立つが、それは少し後で考えるとして、まずはデイントンのフッサール批判がどの程度正当かを確認しよう。

まず、原印象を瞬間的現在の意識作用とみなした上で、これを経験の根源的な単位だとしているが、このような理解は誤りであり、これはすでに現象学者たちが批判してきたところである。フッサールは繰り返し原印象が把持から独立に見出されるものではないことを強調している。また実際、フッサールはジェイムズを参照しながら、継起の経験と経験の継起とを区別したのであるが、この議論は時間論の初期段階で見られるものであり、デイントン自身も示唆しているように、のちにフッサールは客観的時間と、内在的な体験の現象学的時間と、時間を構成する意識流という三層構造を見出すに至った。このことを考えるならば、後期でも依然として、フッサールは覚知—内容の図式に依拠しつつ、PSAのような構えをとっているのかどうか本来問われるべきことだろう。そしてすでに述べたように、時間を構成する意識流の層では、むしろこのような図式は成立しておらず、覚知の時間性と内容の時間性の区別のようなギャップはない。実際フッサールはこの層においては、「構成するものと構成されるものとが合致している」(Hua.X, 83, 381)と述べている。

しかし他方、把持だけを独立に取り上げてみれば、把持する意識と把持されるものとは同時的ではありえない。把持はたったいま過ぎ去ったものを保持する働きでありながら、それ自体はやはり現在に属する意識であるから、むしろ両者の非同時性は本質的である。このことを考えると、フッサールはPSAを受け入れているのかもしれない、と思われるかもしれない。つまり時間意識は、いまの点からいわばサーチライトのように時間的広がりを見渡しているように捉えられるかもしれない。しかし重要なことは、どのような原理を原初的なものとして立てた上で理論を構築しているのか、ということと、現象的なものにおいて確認でき記述できる事実とを、混同しないことである。そして、PSAのサーチライトのようなイメージは、記述的に確認できる事実ではなく、そこから要請される抽象的な原印象と把持という二つの原理から

合成されてはいるが、これもやはり抽象的なモデルであり、説明項のセットである。ここにデイントンの PSA と PPC に対する私の違和感がある。私の理解では、フッサールはある意味では PSA と PPC を二つとも受け入れている。しかしその場合、PSA は継起とは別のことがらを説明する際の原理であり説明項である一方、PPC にあたるのは、現象的経験の中に記述的に見出される「構成するものと構成されるものとが合致している」という事実であり、両者に矛盾はない。つまり、自己覚知によって直接的に見出されるのは、意識作用と内容との合致であるが、いわばあたかもレゴブロックでできた家のように現実に継ぎ目が見えるような仕方、意識作用と内容とが組み合わされているわけではなく、それは後からの抽象化と分析によって、意識作用の側面と内容的な側面とに区別されるのである。

また、デイントンが挙げたいくつかの難点を考えてみると、いずれもフッサールにおいて説明項とされている他の原理をもとに考慮に入れていないことによって生じている。たとえば「反復される内容」などの無限の複雑化の問題が生じるのは、フッサールの言う「受動的綜合」ないし「原連合」を考慮していないからである。しかしこれはデイントン自身がいう「オーバーラップ」とほぼ同じことなのであり、内容が綜合され内容的持続が重なり合うことで、数的に一つの音はまさしく一度しか聞かれないのである。また、「とどまる内容」と「詰まった意識」の問題は、把持意識がもつ「沈退」による潜在化の働きを考慮していない<sup>12</sup>。一度経験したものは意識のうちに永遠にとどまるわけではなく、過ぎ去っていくことで消失していくのだが、そのことによってまったく無になってしまうのではなく、潜在化し、あらためて想起される可能性を保持する。これは原理というだけではなく記述的に確認される事実でもあるのだが、この働きをもたない把持作用を抽象的な原理として立てた上で、すべてをそこから説明しようとするのには無理があるだろう。

では結局のところ、時間的継起の实在性を十分に説明できてかつコンパクトな理論のためには、どのような原理を立てればよいのだろうか。私の考えでは、(多くの現象学者は同意しないかもしれないが) 原印象を純粋に瞬間的な現在意識として立てること自体は問題ない。しかしそれに加えて、等しく根源的な原理として認められるべきなのは、把持ではなく、原印象から把持への変様の意識である。つまり、原印象と、変様の意識の、二つである。

原印象だけを唯一の原理として立てることが何の説明にもならないことは明らかであろう。では、原印象と把持と、二つの意識を等しく根源的な原理として立てればよいのではないか。実際そのほうがフッサールに忠実だと思われるかもしれない。しかし、把持は原印象の変様であるのだから、原印象が瞬間的なのであれば、それが時間的に変様してもやはり瞬間的であろう。これでは、デイントンがあげた記憶説および PSA と同じく、時間の非实在論が帰結してしまう。というのも、そこには時間的継起が欠けているからである。そこで原印象が瞬間的であることを認めたくえて、それとは別にごく短い継起を変様に担わせておけば、把持は原印象の変様として派生させることができるし、またこれらを多重化することで、連続的な受動的綜合や沈退の働きも派生的なものとして説明できそうである。

また、把持をむしろ根源的として、原印象はそこから遡及的に構成される、という議論もありそうだが、これはフッサールの議論ではない。その場合、現に経験されている最中にはな

く、ある程度過ぎ去った時点から、はじめて出来事や対象は構成され、意味を持ち、一つの存在者として時間のうちに位置づけられる、というような議論となる。このような議論は上のものよりも強い反実在論となるように思われる。結局のところその対象が「現に経験された」とさえ言うことができず、虚構と現実とを究極的には区別できないのではないだろうか。

もう一つの候補としては、原印象も放棄し、変様がもっとも根源的とし、むしろ変様とは現在と過去とを分節化する根源的な差異化の働きである、とする考え方もありうる。これは時間の（無方向で可逆的な）流れないし運動のみを保持し、そうした運動である限りである種のリアリティを確保する議論となるだろう。しかし私は原印象も等根源的と考えるのがよいと思う。そうすることで、時間位置の同一性が遡及する点をあらかじめ指定することができるからである。また、変様からはじめて原印象と把持とが分節化されるのであれば、原印象も把持も等しく派生的なものとなるのだから、時間が方向を失って可逆的になってしまうように思われる。逆に言えば、原印象も変様とともに根源的と考えることで、時間の不可逆性がここに根拠を持つことが示される。

この点は、デントンの議論よりも、超越論的観念論の説明責任はやや重いことを示すことになる。超越論的観念論は、世界の基本的な構造を超越論的意識の働きによって説明するのだから、世界を普遍的に支配している時間の不可逆性という形式は、(デントンのように)内容固有の現象的性格によってではなく、基本的な形式として説明されるべきである。

いずれにしても、この変様を原理として立てるというアイディアは、デントンの、時間的継起は直接的に経験されている、というテーゼをヒントとして得られた。実際、変様とは継起の原形式にほかならず、またごく微小でそれはほとんど現在の瞬間と見分けがつかないかもしれないが、しかし点的瞬間よりは幅を持つだろう。それは実際に変様する運動そのものであり、またはじめから直接的に経験されている。

## 註

<sup>1</sup> 今回は (Gallagher, 2003), (Zahavi, 2007) を参照することができた。なお本論とは異なる心の哲学の立場からの書評としては、(太田&佐金, 2010) 参照。

<sup>2</sup> 本論では *Stream of Consciousness* (Dainton, 2000) のみ、ページ数のみで参照指示する。

<sup>3</sup> トークン token とはタイプ type の対語で、一般的な類型に対する個別者を言う。例えば村田憲郎は人間のトークンであり、日本国籍、九州出身、男性、大学教員というのはタイプである。

<sup>4</sup> 後述するが、awareness を覚知、be aware of を覚知すると訳す。

<sup>5</sup> ここには飛躍があるように思われる。内容の覚知に対する存在依存だけから、覚知が内容を「生み出す」ということは帰結せず、ここでは様々な依存の仕方を細分化して明確にすべきであろう。超越論的観念論はこの種の飛躍には慎重にならなければならないと思う。

<sup>6</sup> この概念は E. R. Clay によって取り上げられ、ウィリアム・ジェームズによって展開された。

<sup>7</sup> この次の節で、デントンは記憶説の弱い主張にあたる「パルス説」というものを取り上げている (p.128-131)。これはごく短い持続を最小単位として前提し、こうした持続の結束によって経験の経過を説明するという興味深い説だが、フッサールとは無縁だと思われるので割愛する。

<sup>8</sup> concur には「共に起こる」という意味もあり、concurrency を「共生起」と訳すことも考えたが、経験の「端的な把握」からすれば、覚知と内容という本来は別々の要素が一緒になって生起するというよりは、両側面は記述的には区別されないことにポイントがあると思われるので、



「合致」と訳す。PSA, PPCともミラーからとられた用語。(Miller, 1984, p.107, 109)

<sup>9</sup> なお、自然主義をとるデイントンは、この持続には生理学的に決定される、人間に固有の限界があると考えており、その持続の閾値をめぐる考察がある (p.169-171)。しかしこの点でザハヴィは、現象学的立場から、この時間の長さを測定することなどは問題にならない、と批判している。

<sup>10</sup> ギャラガー (Gallagher, 2003), ザハヴィ (Zahavi, 2007) 参照。

<sup>11</sup> 本稿脱稿後、この点に関わると思われる (Dyke, 2012) の議論を読んだ。還元的・消去的ではない論者がよくとる「証明責任の戦略 *burden-of-proof strategy*」とは、デフォルトではない主張をする側に証明責任を負わせるものであるが、この戦略の正当性に対して Dyke は否定的である。こうした議論については今後もフォローしていきたい。

<sup>12</sup> 「とどまる内容」が見出されないという批判に対して、ギャラガーは把持は実的内容をもたず、把持される内容は志向的内容だと応答しているが、この点に関してはより立ち入った考察を要する。

## 文献表

Dainton, Barry (2000): *Stream of Consciousness. Unity and Continuity in Conscious Experience*. Routledge

Dyke, Heather (2012): "On Methodology in the Metaphysics of Time" in: *The Future of the Philosophy of Time*. ed. Adrian Bardon, Routledge, 2012, p.169-187

Gallagher, Shaun (2003): "Sync-Ing in the Stream of Experience Time-Consciousness in Broad, Husserl and Dainton" in *PSYCHE* (9)

Husserl, Edmund: *Husserliana. Gesammelte Werke*. Springer (引用は略号 Hua. の後に *Husserliana* の巻数, ページ数で統一する)

Kant, Immanuel (1998): *Kritik der reinen Vernunft*. Felix Meiner Verlag

Miller, Izchak (1984): *Husserl, Perception, and Temporal Awareness*. The MIT Press, 1984

Zahavi, Dan: (1999): *Self-Awareness and Alterity. A Phenomenological Investigation*. Northwestern University Press

--(2007): "Perception of duration presupposes duration of perception -- or does it? Husserl and Dainton" in: *International Journal of Philosophical Studies*, 15/3, 2007, p.453-471

太田紘史&佐金武 (2010): 「書評 Barry Dainton, 『*Stream of Consciousness: Unity and Continuity in Conscious Experience*』 Routledge, 2006 (revised paperback edition)」『京都大学文学部哲学研究室紀要 *Prospectus*』 (2010), 12, p.106-118